セックス／ジェンダー図式の使用と gender の定義

須永　将史

0　問題の所在

ジェンダー概念が日本のアカデミズムで使用されはじめてから，約 30 年の年月が経った．このジェンダーという概念の普及はめざましく，アカデミズムのなかだけではなく政策の場面においても用いられるようになり，1995 年以降，男女共同参画の枠組み内でも用いられるようになった．現在最も新しい版となる平成 22 年に決定された男女共同参画基本計画（第三次）では，ジェンダーは次のように定義されている．

> 「社会的・文化的に形成された性別」のこと．人間には生まれついての生物学的性別（セックス／sex）がある．一方，社会通念や慣習の中には，社会によって作り上げられた「男性像」，「女性像」があり，このような男性，女性の別を「社会的・文化的に形成された性別」（ジェンダー／gender）という．「社会的・文化的に形成された性別」は，それ自体に良い，悪いの価値を含むものではなく，国際的にも使われている．

上記のように定義されたジェンダー概念には，注目したい特徴がある．それはすなわち，セックスとジェンダーは，それぞれの概念が示す領域が異なるように定義されていることである．セックスは「生まれついての生物学的性別」として定義されており，ジェンダーは，それに対し「社会的・文化的に形成された性別」と定義されている．つまり，2 つの概念は，どちらも「性別」を意味する語でありながら，異なった側面からそれを意味しているのである．

このようにセックスとジェンダーを 2 つの側面から，まるで対立項のように定義する仕方は，この男女共同参画基本計画だけでなく，社会学，女性学の事典にも見受けられる（井上ほか編 2002; 見田ほか編 2012）．

またこのようなセックス／ジェンダーという図式的な定義は日本独自のものではなく，英米圏においても流通している．Raewyn Connell は，英米圏において，このセックス／ジェンダーという図式が招く，生殖上の性差と社会的な性差ふたつの領域から形成される理論モデルを二領域モデルと呼び，その普及を以下のように説明している．

> 「セックス（原）対ジェンダー（文）」という図式は，明らかに，西洋哲学においてなじみ深い「身体対精神」の区別に由来している．おかげで，そうした図式は容易に受け入れられた．アメリカのリベラル・フェミニズムが最高潮だった 1970 年代，この二領域モデルは，変化に対して楽観的な，さらには希望に満ちた見通しを支持するものであった．……当時の言い方で言えば，性役割期待は変更可能であり，性役割の社会化もそれにしたがって変わるだろう，となる．（Connell 2002=2008: 61）

だが続けてConnellは,爆発的に普及したセックス／ジェンダーの図式の行き詰まりを,つぎのように説明する.

> 文化的に選択された差異（「性役割」）としてのジェンダーという考え方は，その差異の一方の側，すなわち男性的なものに，もう一方の側よりも常に高い価値が置かれる理由を説明できなかった．ジェンダーを身体から切り離すことは，身体をより強調するフェミニズムの発展に逆行するものだった．（Connell 2002=2008: 62）

代表的には荻野美穂が論じたように，フェミニズム，女性学，ジェンダー論にとって身体の問題は中心的な論点となってきた（荻野 2002）．フェミニズムや女性学，ジェンダー論は身体性を重要視してきたにもかかわらず，身体性とは異なる領域を意味する概念であるジェンダーを重要な分析概念として使用している．では，自身が問題とする身体性という領域を意味しない語を分析概念として用いていることになってしまうのだろうか．もちろん，それは筆者がフェミニズム，女性学，ジェンダー論に対してもつ直観とは異なる．だが,そうであるならば,ジェンダーと身体性の関係とはいかなるものなのだろうか.ジェンダーとはどのような目的で，何を示すための語なのか，今一度考えておく必要があるのではないだろうか.

sex と gender がセックス／ジェンダーという図式として定着したことは，特定のプロセスを経た帰結である.にもかかわらず,社会科学における多くの領域で使用される一方で,しばしば gender は，その語がどのような歴史的変遷を遂げてきたのかを忘れられがちである．つまり，gender の意味は,「あたかも常に今日におけるように利用可能であったかのように非歴史化」されるような,一種の「現在中心主義」に陥りやすい傾向にあるのだ(Germon 2009=2012: 9-10; Dreyfus & Rabinow 1983=1996: 176)．これに対し，Jennifer Germon は英米圏のコンテクストにおける gender の歴史的変遷をあきらかにした（Germon 2009=2012）.

Germon の考察を受け，本稿では，gender の使用の歴史的変遷を「どのようにセックス／ジェンダーという図式が成立したか」に焦点をしぼって考察する．現在我々が使用している gender の意味を自明視しないため，また gender が切り開いてきた領域の系譜を非歴史化しないためにも，短期間の間に遂げてきた変化の筋道を明らかにしようと思う.

ところで，gender が用いられる領域は，フェミニズム，ジェンダー論に限られるわけではないことにも留意しておきたい.もちろん,フェミニズムやジェンダー論者たちが,ジェンダーを分析概念として鍛え上げてきたことは紛れもない事実だが，次節でみるように,そもそも gender は，性科学を出自とする概念であり，性科学もまた一方で gender に関する議論を積み重ねてきたのだ.これらのことを射程に入れ,本稿では,初期性科学者の gender の使用から，日本でセックス／ジェンダーが使用され，定着するまでの変遷をたどる[1].

1　初期の gender

1.1　Money の gender，Stoller の gender

ヒトの性別についての概念として gender を初めて使用したのは，周知のように，John Money だった．gender は，もともとは生後間もない乳児の性器があいまいな場合に，後天

的に性別を割り当てるために用いられた．1985 年の論文で Money は，gender を次のように明確に定義している．

> gender：生殖器面の基準のみによる場合よりも，より包括的な身体面および行動面の基準からみた場合の，男性や女性，あるいは男女混合としての，人の人格的，社会的および法的地位を指す．（Money 1985: 78［傍点筆者］）

ここでの重要なポイントは，「身体面よび行動面の」基準という側面にあるだろう．つまり Money の gender の定義は，男女共同参画をはじめ広く普及しているセックス／ジェンダーという図式における「社会的・文化的性差」という側面の gender だけを指すのではない．そうではなくて，生殖器面な基準を包括する「身体的行動的な」基準を含めて定義される地位（=status）なのである．つまり，Money の定義する gender は非常に「広い」定義であり，sex/gender の図式のうちの sex を包括するのだ．これは 80 年代の Money の傾向というわけではなく，彼は gender を使用しはじめた当初から一貫して身体的な側面をその定義に加えていた（Germon 2009=2012）．

Money の gender を参照し，性心理学者 Robert Stoller は gender を再定義している．Stoller による gender の定義は以下のようなものだ．

> 性別（gender）という言葉は，生物学的意味合いよりもむしろ心理学的または文化的意味を含んでいる．性（sex）にとっての適切な言葉が male female であるなら，性別（gender）に対応する言葉は masculine feminine である．（Stoller 1968=1973: 8）

Money に対し，Stoller は異なった定義を与えている．おおきな違いは，Money が gender を sex を含む包括的概念として定義したのに対し，Stoller は sex と gender を，それぞれ別の領域を指す概念として定義しているという点だ．

1.2　Stoller の「功績」

Jennifer Germon は，Stoller が gender 概念に対し行なった 3 つの介入を指摘している．要約すると以下のようになる．

第 1 に gender identity と gender role の分離である．これによって，「文化的というよりは心理的な現象としての gender」に焦点を当てることができた（Germon 2009=2012: 105）．つまり Stoller は，gender identity という個人についての概念に，自身の分析の対象領域を定めることができたのである．

第 2 に，生後 18 カ月の間に起こる gender 習得の第二臨界期の帰結のために core gender identity というタームをつくりあげることである．Stoller はこれによって，「自分は男である（I am a male）という自覚」と「自分は男性的である（I am manly）という信念」を区別しようとした．言いかえれば core gender identity は，たとえ自分が女性的だ（I am feminine）としても，自分はそれでも男だ（I am [none the less] a male）という自覚を意味するというわけである．

そして第 3 の介入が，sex と gender の分離である．

Stoller は sex というタームを，その生物学的な含意ゆえに忌避した．同様に sexuality というタームも，その意味の多様性ゆえに忌避した．gender はそうした概念的な負荷をともなわないため，きわめて有望と思われたのだった．より重要だったのは，gender によって Stoller が肉欲や肉体の穢れたリアリティから解放されたということだ．gender は Stoller に，思考，行動，人格のような心理学的な現象をひとつひとつ切り離して議論することを可能にした．（Germon 2009=2012: 130）

Germon の指摘において重要なのは，この 3 つの介入は理論的段階にしたがって進行し，第 3 の介入，すなわち sex/gender の分離は理論的な帰結としてあるということである．Money の gender に対し，「Stoller がおこなった理論的な研究はジェンダーを一層深く，強固にその二元論に埋め込むことに役立った」（Germon 2009=2012: 103）．

冒頭で述べたように，sex/gender という図式は急速に広がり，英米圏だけでなく日本でも広がった．その背景には Money の概念化というよりは，それを図式化し，二元論の枠組みで理解できるように再概念化した Stoller の貢献があった．そして Stoller の gender は，次節でみるように，性科学という学問領域だけでなくフェミニズムのひとびとにも普及し，使用されていくことになるのである．

1.3 Millet の gender，Oakley の gender

フェミニズムの中では，Kate Millet や Ann Oakley が 70 年代に gender を利用した．ここでは，Millet や Oakley が，gender を使ってどのようなことをフェミニズム・女性学にもたらそうとしたのかを述べる．これによって，同時に，彼女たちの英米圏におけるフェミニズム・女性学への gender の導入の過程を描くことを試みる．

1.3.1 Millet の gender

Millet は家父長制をみいだすことができる基盤を 8 つ挙げている．それはすなわち，①イデオロギー的基盤，②生物学的基盤，③社会学的基盤，④階級的基盤，⑤経済的・教育的基盤，⑥暴力の基盤，⑦人類学的基盤，⑧心理的基盤である．

このなかでは，生物学的基盤に関して述べられた節においてのみ，gender が用いられている．Millet にとって gender は，生物学的基盤と関連する概念であり，現在のような社会科学的な概念としての使用は見られない．では Millet は，どのように gender を自身の議論に組み込んだのか．生物学的基盤の節において，Millet は次のように述べている．

新しい研究は，gender が圧倒的に文化的な性格のものであること，言いかえればセックスカテゴリーの点からみたパーソナリティ構造について，かなり具体的な積極的証拠をあげている．（Millet 1970=1973: 78）

幼児期を通じて起こるジェンダー・アイデンティティの全発達に内包されるのは，気質，性格，関心，地位，値打ち，ジェスチュア，表現について，それぞれのジェンダーにふさわしいものとは何かについて，両親や同輩や文化の抱く考えの総合計である．（Millet 1970=1973: 81）

上記の引用から読み取れるのはまず，gender という語は，『性の政治学』においては，個人が獲得する性別としてのみ，使用されていることである．つまり，ここでの gender は個人が獲得するパーソナリティとして男らしさ，女らしさがあることを示すために用いられている．

言い換えれば，Millet が生物学的基盤の項において gender を用いることで示そうとしたのは，男らしさ／女らしさの獲得が，生物学的基盤とは異なるその他の要因に多大な基盤をもつことであり，それを表現するための概念が性科学によって生み出されたということだ．Millet にとっては，「その他の要因」は家父長制的な文化と固く結びついており，家父長制的な文化によって形成される個人のパーソナリティを gender として示すことで，フェミニズムの問題領域を gender で表現される領域へと拡張することが目指されていたのだ．このときに生物学的基盤と家父長制的文化という基盤を明確に対立させることで，sex/gender の図式が対立的概念として成立する．

だが，Millet の gender の扱いは，実は非常に少ないものである．これに対し，Oakley は，gender を大々的に自身の理論にとりこもうと試みている．

1.3.2 Oakley の gender

Millet が『性の政治学』において家父長制を論じるための各論として gender 概念を論じたのに対して，Oakley は大々的に gender を自身の理論に取り込み，積極的に分析概念として使用しようとしている．Oakley は特に，*Sex, Gender and Society* において，その精緻化を試みている．以下では，*Sex, Gender and Society* において Oakley が試みた精緻化を分析することで，ジェンダー概念の導入がフェミニズムにおいてどのように取り入れられ理論化されていったのかを探る．

Oakley において顕著なのは，sex/gender の図式を非常に強調していることである．この図式は，sex と gender を対比しているという点では Millet と同様であるが，さらに特徴的なのは，sex と gender のそれぞれに対し，下位概念として Stoller のいう male/female, masculinity/femininity を採用したことである．Oakley にとっても後者の gender（masculinity/femininity）は獲得されるものであり，「このような性別へのパースペクティブは，社会学の基礎概念であるところの『役割』として性別を見る視点を生み出した」のである（江原 2000: 47）．

まず Oakley が sex を生物学的なタームとして，gender を心理学的・文化的なタームとして定義していることに注目したい．

> たとえば女性という sex に属するものはだれでも自動的に女性という gender に属しているとされる．しかし，本当はそうではない．男性や女性，少年や少女になる／であるということは，特定の生殖器をもつことと同様，ドレスや，ジェスチャーや，職業や，社会的ネットワークやパーソナリティの機能でもあるのである．（Oakley 1972: 158）

この定義においては，第 1 に，「性別」を示す概念である sex と gender が，それぞれ別の側面から「性別」を示すことが強調されており，同時に，それぞれの概念が示す性別が一致しない可能性が強調されている．つまり sex と gender は，対立する概念であることが強

調されているのだ.

第2に，genderを「獲得する」ための複数の要因が挙げられている．sexがほぼ生殖器によってのみ定義されることが述べられる一方で，genderに属する要因は非常に多く設定されている．言い換えれば，生殖器以外のほとんどの社会的要因が，genderを定義するための資源として用いられる，とOakleyは述べているのである．

繰り返すが，このようなOakleyのgenderもまた，Milletと同様，Stollerのsex/genderを引用している．*Sex, Gender and Society*においてOakleyは，上記のようにsexとgenderを定義した後，Stollerの定義を引用し，自身の論の根拠として紹介している．Oakleyが引用したStollerの定義は次のようなものだ．

> 性別（gender）という言葉は，生物学的意味合いよりもむしろ心理学的または文化的意味を含んでいる．性（sex）にとっての適切な言葉がmale femaleであるなら，性別（gender）に対応する言葉はmasculine feminineである．（Stoller 1968=1973: 8）

sexにmaleとfemaleがあるのに対し，genderにfeminineとmasculineがあるという定義は，genderという概念がある程度精緻化されていて，形式的に論を進めることを可能にするという点で，Oakleyにとっては有用だっただろう．これによって，Oakleyは，「genderは，しかしながら文化の問題である．それは『masculinity』と『femininity』の中の社会的な分類を参照している」と宣言し，文化の問題へと分析を進めることができたのである（Oakley 1972: 16）.

以上本項（1.3）では，MilletとOakleyが，sex/genderの図式をとりいれていたことを指摘した．MilletもOakleyも，「身体の不変性」や「生物学的基盤」とは異なる意味での「性別」を論じるために，gender概念を用いたのだ．性科学とフェミニズムの関係を，genderの扱いに焦点を向けて論じるという課題は，別稿に譲ることになるが，すくなくともここでは，sex/genderというStollerの図式がフェミニズムにとって非常に有用なものであったこと，このことをここでは再度確認しておく．次節以降では，このsex/genderという図式が，セックス／ジェンダーとして日本で使用されるようになった経緯を述べる．MilletもOakleyも日本では有名な論者だが，日本でセックス／ジェンダーが使用され，普及することになった経緯は，彼女たちの影響下においてではなかった．

2　Illichの「ヴァナキュラー・ジェンダー」とエコフェミ論争

では，genderは日本ではどのように使用されはじめたのであろうか．また，それはいつから使用され始めたのであろうか．この点について井上輝子が次のように述べている．井上は，量的な調査法を用いて，ジェンダーという語に関する出版物の動向を把握した．

> 「ジェンダー」については，1980年以来，一般図書のタイトルに使用されてきた．国会図書館の初出は，山本哲士編『経済セックスとジェンダー』〔シリーズプラグを抜く〕，新評論，1983年であり，山本哲士『ジェンダーと愛——男女学入門』（1990年）など，イヴァン・イリイチ

流のジェンダー概念を使用する書籍であった．現在につながる，いわゆるジェンダー研究での書物の初出は，江原由美子ほか『ジェンダーの社会学——女たち／男たちの世界』（新曜社，1989 年）で，以後，「ジェンダー」を含む図書の出版が確実に増加していき，2000 年以降は，毎年 50 点から 80 点の図書が出版されている．（井上 2006: 65-66）

山本らの『経済セックスとジェンダー』が日本の出版物における最初の「ジェンダー」の使用だったと井上は述べている．この『経済セックスとジェンダー』の出版は，フェミニズム・女性学を巻き込むひとつの論争を導いた．80 年代のこの論争を経ることで，セックス／ジェンダーという図式は次のように広く普及することになった．

一方で，『経済セックスとジェンダー』で使用された gender は，現在の我々とは，まったく異なる意味を担わされていた．論争の後，ジェンダーは Millet や Oakley が参照されながらフェミニズム・女性学によって彫琢されてゆくことになるのである．他方，『経済セックスとジェンダー』の編者である山本哲士もまた，その後，Stoller のセックス／ジェンダーの図式を自身の論の根拠として据えてゆくのである．

こうして，ジェンダーという後の意味に違いはあれど，セックス／ジェンダーという図式自体はのこり，それは現在まで続いている．

ところで，『経済セックスとジェンダー』の出版よりも先に gender が日本で使用される契機は本当になかったのだろうか．実は，70 年代，Millet をはじめとする何人かの英米圏の論者の著作が翻訳されているが，少なくとも片仮名で「ジェンダー」と訳されることはなかったのである．井上のおこなった量的な研究では，片仮名表記の「ジェンダー」を対象としているため，70 年代に gender に関する文献が邦訳されていたとしても，それを包摂することはできなかった．70 年代の詳細についてはまた，稿を改めて論じることとしたい．そのような事情をふまえ以下では，片仮名で「ジェンダー」や「セックス」と訳された文献を扱う場合は，そのまま片仮名表記を使用する．

以下では，Ivan Illich の「ヴァナキュラー・ジェンダー」論とそれに続くエコフェミ論争の経緯をたどる．

2.1　エコロジカル・フェミニズム論争の経過

1983 年に『経済セックスとジェンダー』が出版された．この著作には，Illich の「ヴァナキュラー・ジェンダー」が翻訳され，掲載されていた．それだけでなく，この本には他にも多くの論者がジェンダーに関する論文を寄稿している．冒頭では，Illich の「ヴァナキュラー・ジェンダー」を下敷きに，次のように編集意図がまとめられている．現代社会とは市場経済を土台とする男女の差異の無い（ジェンダーのない）〈経済セックス〉者の世界である．このような世界ではそれぞれの文化に固有男女の差異は失われ，それは性差別を招くだろう．そこで産業社会とは異なる文化の在り方を考えるべきではないだろうか，というものである（山本編 1983）．その後 1984 年に，Illich 自身の論集の『ジェンダー』が翻訳出版され，そこには「ヴァナキュラー・ジェンダー」も再収録された．

この一連の流れに対し上野千鶴子は，1985 年の論文で「フェミニズムを歪曲し矮小化するやり方は，あからさまな反フェミニズムよりも危険であくどいやりくちである」と批判している（上野 [1985] 1986: 119）．上野はこの論文において，Illich 自身の理論と Illich 受

容を形成する日本の風土を批判し，女性解放の理論的課題を先に進めることを試みた．そしてこの上野の批判がいわゆるエコロジカル・フェミニズム論争（以下エコ・フェミ論争）の端緒となった出来事であり，その後この上野の批判に対し青木やよひが反批判をおこなったのだ．

桜井裕子は，1990 年，エコ・フェミ論争を総括する論文で，エコロジカル・フェミニズムに向けられた批判を，エコロジカル・フェミニズムがもつ母性主義と反近代主義に対するものと総括している（桜井 1990: 126）．だが，桜井も含め，これまでこの論争に対して総括を試みてきた論者の意見を総合すると，両者の立場は似通っていたということがいえる（落合 1989; 桜井 1990）．

> 上野氏らにしても，青木氏と同じく抽象的な人間主体概念への批判を踏まえて，この論を立てているのであり，社会と文化が生産・再生産される過程において，いかに性別が関与してしまうかということへの，透徹した認識に基づいているからである．（江原編 1990: 31）

たしかに，上野と青木の立場や理想とする社会は酷似していた，という点は非常に重要な指摘だ．しかし筆者は，この論争の端緒となった gender という語の理解については極めて特徴的な違いがあったのではないかと考えている．以下では，Illich の gender がどのように日本に受容されたのかという点を考察することで，この違いを際立たせることを試みる．

2.2 エコフェミ論争のジェンダー概念

Illich は，当時英米圏のフェミニズムの論考を摂取し，1981 年，gender を自身の哲学に組み込む形で再定義し，「ヴァナキュラー・ジェンダー」を著した．「ヴァナキュラー・ジェンダー」において，gender は次のように定義されている．「ジェンダーというのは，セックスと異なるだけでなく，はるかにそれ以上のものなのである」（Illich 1983=1984: 142）．では，gender とは具体的にはどのようなものなのか，続く Illich の記述を見よう．

> ヴァナキュラーなジェンダーを，両義的な対照的補完関係にとっての土台をなすものと考え，そして経済的中性者のセックスというものを，この土台を否定または超越するための現代的実験として考えてみると，これは適切なとらえ方となるかもしれない（Illich 1983=1984: 150）．

Illich にとって gender とは，男女で一対の相補性をもち，それぞれの社会に固有な性質をもたらす「根源的な社会的両極性」である（Illich 1983=1984: 142）．それに対し，経済産業社会が発展するにつれて，男女の性差が「生物学的性差」による雌雄性のみで区別されることになる．Illich はこのような性差を〈経済的セックス〉と呼び，それがはびこることを嘆いた．つまり gender は，経済産業社会批判のために持ち出された用語であり，セックスとは明確に異なるものとして定義されている．Illich にとって gender とは，「理想的な社会」において共有される，一種の男女の「あるべき関係性」なのだ．この限りにおいて，sex と gender は明確に分断されてなければならず，sex/gender という図式は，Illich にも見出すことができる．言い換えれば，Illich の sex/gender は，フェミニズムを経由した Stoller

の図式の，再定義なのである．

このような gender の捉え方は，当時の人文・社会科学言説の中で相当程度普及し，すでに述べたように，Illich のこの考えに賛同する者たちによって『経済セックスとジェンダー』のような特集本が出版されたのだ．そのなかで青木やよひは，gender に宇宙論的性差という訳語をあて，次のように述べる（青木編 1983: 180）．

> 私はこれまで，性差（sex difference）を三つに分けて考えてきた．すなわち，生物学的根拠にもとづいた第一次性差と，それが社会的に発展強化された第二次性差，さらにそれらとはほとんど関係のない文化的な第三次性差である．そして第三のものに，ジェンダーの概念を与えてきた（青木編 1983: 180）．

青木の述べる第一次性差，すなわち生物学的根拠に基づいた性差が，現在でいうところのセックスを想定していると考えることは妥当だろう．その次に，生物学的性差が「社会的に発展強化された第二次性差」が据えられているが，これは現在ならばジェンダーを意味すると考えられてもおかしくない．にもかかわらず，青木の考えるジェンダーとは，それらとはほとんどかかわりのない文化的な第三次的性差なのである．別の文献で，青木はジェンダーを次のように定義している．

> ジェンダーとは，象徴的な宇宙の生体系を支える雌雄の二要素であり，それがくずれてしまえば，その転写概念である男性原理と女性原理の均衡もくずれざるをえない．（青木 [1985] 1986: 202）

青木にとってジェンダーは，Illich と同様，「あるべき男女の関係性」を意味するものであり，そして，青木の枠組みでは，性役割がジェンダーと一致している場合が，理想的な社会なのだ．青木はここで，ジェンダーと性役割が一致した理想的な例として，インドネシアのある部族を挙げている．

セックスとは異なる，あるべき（還るべき）男女の関係性を示すために用いられるのがジェンダーならば，セックスとジェンダーは全く異なるものであるとして前提されなければならない．その限りで，青木もまたジェンダーをセックス／ジェンダーの図式のもと理解しているのである．

青木はジェンダーという語で何をあらわそうとしているのか，さらに詳しく見てみよう．青木のジェンダーは，文化的に広く共有される（べき）規範的価値を帯びた概念として定義される．青木が宇宙論的性差ということばを訳語として充てるのは，その規範的価値を共有する文化が外延なき拡がりを持つものであること，そしてそれが理想的かつ「自然」な男女の関係性であることを示すために持ち出されていると読むことができる．

> 宇宙論が，その媒介物である自然を通じて，人間の聖なる価値観として内化されている限り，性役割は性差別と直結しないはずである．私たちの社会では，そうした状態を復元することはもはや不可能であるとしても，失われたはずの宇宙論の痕跡を追って，それがいかにして差別

の体系に組み込まれたかを知ることは必要である．（青木編 1983: 181）

Illich にせよ青木にせよ，彼らの使用する gender は現在一般的に理解されているジェンダーとは異なったものであり，理想的な（ある意味本質主義的な）性差のあり方を示すための概念として用いられているのである．むろん，これ以降，ジェンダー概念はフェミニズム・女性学者によって彫琢されていくのだが，このとき確立されたセックス／ジェンダーという図式自体は，そのまま日本のアカデミズム内にとどまることになる．

ところで，この論争の後，『経済セックスとジェンダー』の編者である山本哲士自身が行なった「彫琢」に触れておきたい．山本は 1990 年出版の『ジェンダーと愛』で，Robert Stoller を引用しながら次のように書きだしている．

> 1964 年，ロバート・ストラーが「ジェンダー・アイデンティティ研究」に関する論稿を，『精神分析国際ジャーナル』誌に書き，1968 年，『セックスとジェンダー』をまとめて以来，《セックスとジェンダー》の識別を，男性性 masculinity と女性性 femininity の問題に関して論じることがフロイト理解および精神分析理論上，ひとつの大きな課題となってきている（山本 1990: 3-4）．

ここで山本がおこなっていることを特徴付けておきたい．エコフェミ論争当時，山本はジェンダーを，Illich の思想を受容し定義していた．それに対し，上記の引用では，Illich ではなく Stoller を参照している．1980 年代，Illich の受容によって流通したジェンダーだが，山本はその後性心理学という科学の概念としてのセックス／ジェンダーを議論の前提に据え，そこから山本自身の議論を展開しているのである．

2.3 エコフェミ論争／80 年代の女性学・フェミニズム

では，当時のフェミニズムの言説内では，どのような動きがあったのだろうか．このとき，フェミニストたちは gender に無関心だったのだろうか．

嶋田津矢子が 1984 年に，当時のジェンダー言説の見取り図を描いた次の論文が手掛かりとなる．この論文の中で二か所，ジェンダーについて注目している箇所がある．1 箇所目は当時における最新の海外のウーマンリブ理論の紹介のなかで言及される箇所である．ここでは，ジェンダーは「問題にされる」対象として言及されるのだ．

> ここに，gender role という表現を問題にしているのは，婦人問題の所に用いられる"sex role"にいう生物学上の性（sex）とは無関係に，男女の別なく共通に用いられる集合的・一般的通性という意味での「性」と解すべきものである．フェミニズムが，このように「平等の権利と機会」を要求する社会的・政治的運動であると共に，単なる「セックス」ではなく，特に「ジェンダー」を問題にしていることは，婦人運動にとって注目を誘うことであった．（嶋田 1984: 80-81［傍点筆者］）

嶋田はジェンダーを，生物学上の性（sex）とは「無関係な」ものとして理解しようとしていることに注意されたい．嶋田がいうには，「男女の別なく共通に用いられる集合的・一

般的通性という意味での『性』がジェンダーということだが，この場合それがどのようなものなのかは，ジェンダーに関する嶋田の記述がこれ以外ないゆえ，判然としない．しかしながら重要なのは，ここでもやはりセックスとジェンダーは，少なくとも異なるものとして，すなわちセックス／ジェンダーという図式のもと理解されているということである．

2 箇所目は，「イバン・イリイチの『シャドー・ワーク』理論とフェミニズムの新しい地平」と題された節において言及されている．上記の引用では問題にされる概念であったジェンダーだが，こちらでは，節全体にわたって Illich の分析を受け入れ，フェミニズムの今後の方向付けに「貴重な意味を持っている」としている（嶋田 1984: 84）．

1 箇所目と 2 箇所目の嶋田の立場は曖昧なものだが，むしろ次のように考えられるのではないだろうか．つまり，嶋田の曖昧に見えるジェンダーへの態度は，当時のフェミニストたちの反応を反映したものなのである．すなわち，日本のフェミニストは当時，一方で Illich のジェンダー論が人文・社会科学で受け入れられながら，他方で，それとは異なる欧米のフェミニストの言説も参照し，gender の分析概念としての有効性に魅力を感じ始めているという状況にあったのだ．

このような過程を経て，日本のフェミニストたちは，Illich の思想が流通するなか自身たちの議論を深め，1989 年に，江原由美子，長谷川公一が中心となって『ジェンダーの社会学』という教科書が出版されることとなったのである．注意しておきたいのは，この段階でなされたのは，ジェンダーの意味の彫琢であってセックス／ジェンダー図式そのものの改訂ではなかったことだ．

一方，こうしたフェミニズムや社会科学のなかだけでなく，同時期に，日本の性科学という分野でジェンダーが使用された形跡も見ることができる．こちらはどのように gender を定義したのか．それは Illich やフェミニズム・女性学とはどのような関係にあったのか．次節では，80 年代後期に，日本初の性科学を確立しようとし，gender 概念を使用した黒柳俊恭の業績に触れる．

3　日本における初期性科学者の使用

以下では最後に，日本の性科学の領域において，どのように gender が使用されたのかをみることにしたい．

現在日本でも，Money が対象としてきたようなインターセックスドの人々をはじめとする，セクシュアルマイノリティに関する議論において，ジェンダーは重要な分析概念として用いられている（石田編 2008; 鶴田 2009）．とりわけ性同一性障害（＝GID）の議論が活発になったのは 90 年代以降のことである．

だがそれにさきがけて，1987 年，シカゴ大学修士課程を修了した黒柳俊恭によって，『彷徨えるジェンダー――性別不快症候群のエスノグラフィー』が執筆された．この著作は，現在性同一性障害といわれる人々に対し，gender dysphoria syndrome（＝性別不快症候群）という用語で観察を試みたものだ．この著作のタイトルでもある性別不快症候群は，黒柳によって「性の再判定手術を求める人々の感覚，『不快』あるいは『居心地のわるさ』などの症状群を指す．著者による訳である」と述べられている（黒柳 1987: 29）．黒柳が 1987 年という非常に早い段階でこの著作を出版したのにはつぎのような理由がある．それは，

「調査において出会い，協力もお願いした日本の性に苦しむ人びとを，一人の研究者が成長するまで，あるいは他の人が現れるまで，待たせることはできないと著者が感じた」からだ（黒柳 1987: 10）.

またこの著作は，「日本初の性科学」を掲げている．Janice Irvine によれば一般的に，性科学によって「sex が可視化され，公的言説においてより十全に描かれることになった」ということができる（Irvine 2005: 6）．とりわけ黒柳にとっての性科学とは，性に苦しむ人々の意をくみとり，それを公的言説の中で問題化するための重要な学問領域だった．

その目的を達成するために黒柳は，性同一性障害の実態調査を行なうことを重視した．つまり性別違和を感じる個人が，どのように違和を感じており，それをいかに問題化できるか．このための記述を積み重ねることが，彼にとっての「性科学」のあり方だった．

またこのような黒柳の性科学観は，彼の gender の用法に表れている．gender dysphoria syndrome という性別違和に関する用語にとって，gender はその記述のための基礎的な概念として整備されているのだ．個人がどのように違和を感じているかを強調するために黒柳が用いる gender の定義には，Money とは際立った違いがみられる．

> 性別（gender）：バイオロジカルなレベルの性（sex）から区別して社会・心理学的レベルの性としてジェンダーを用いる．『性別』と訳されることが多い．（黒柳 1987: 29）

特徴的なのは，明確にセックス／ジェンダーという図式を使っていることだろう．つまりここでは，ジェンダーの意味から身体性は排除されているのだ．この限りにおいて，この定義は gender に身体性を含める Money の定義とはかけ離れたものなのである．

こうした黒柳の定義は，Money のそれよりも，やはりむしろ Stoller のものに近い．黒柳は，著作全体にわたって，Money と Stoller 両者の確立した性科学の知見を参照しているのだが，ことジェンダーの定義という点に関しては，Stoller のものを使用しているのである．もう一度，Stoller の定義を引用しておく．

> 性別（gender）という言葉は，生物学的意味合いよりもむしろ心理学的または文化的意味を含んでいる．性（sex）にとっての適切な言葉が male female であるなら，性別（gender）に対応する言葉は masculine feminine である．（Stoller 1968=1973: 8）

もう一点 Stoller との共通点を付け加えるならば，この分析の対象領域は，社会・心理的レベルの性という意味をジェンダーに担わせ，「文化」に言及していないという点である．つまり，黒柳の使用するジェンダーは，あくまで諸個人が感じる自身の性別に照準している．黒柳が，「ジェンダーのレベルで自己がどちらかの性に属するという感覚」を性別同一性（gender identity）とし，それを分析概念として採用していることからもあきらかなように，黒柳にとっての当時の性科学者としての課題は，性別違和を感じる諸個人への科学的介入と解決だったのである（黒柳 1987: 29）.

黒柳を取り上げたのは，彼が性科学者として，Money や Stoller を直接参照していることが注目に値するからである．現在の一般的な理解では，ジェンダーという概念を基本的に

彫琢してきたのは，フェミニストや女性学を専門領域とする人々だということができるだろう．筆者が強調したいのは，彼が gender を，彼自身の考える性科学の発展のために分析概念として使用した 1987 年という時代は，フェミニズムがすでに日本でも流通していた時代のことでありながら，黒柳は Illich やフェミニズム・女性学などの言説には一切触れていないことである．

4　結語

最後に，セックス／ジェンダーという図式については次のように述べることができる．黒柳にしても，青木や山本にしても，異なる立場からであるにもかかわらず，セックス／ジェンダーという図式のもと，ジェンダーを定義した．加えて Millet や Oakley の gender も，彼女たち自身は sex/gender の図式のもと理解していた．この図式は，黒柳も，そして Millet も Oakley も，みな Stoller を参照したことが明らかになった．また山本や青木は，もともとは Illich 経由でこの図式を取り入れたが，Illich 自身は英米圏のフェミニズムからこの図式を借用していた．山本にいたっては，1990 年代に入ってから，改めて Stoller を直接参照している．英米圏において Stoller の図式化が広く受け入れられ，フェミニズムにも流用されたことは，すでに Germon が述べたことであるが，本稿の考察によれば，日本においてもそれは同様だったと結論することができる．

以上の結論から，課題として次の 2 つの点を考えることができる．

第 1 に，Stoller ないしは性科学と，フェミニズムの関係性を論じる必要がある．Germon は gender を系譜学という立場から考察したが，逆にフェミニズムの観点から gender を使用することはどのように有用だったのかを考察することも可能である．セックス／ジェンダーという図式は，現在の日本の社会科学においても，流通している．このことを考えれば，Oakley の定義は一定程度の意義があったと認めざるを得ない．そうであるならば，フェミニズムが当時，どのような目論見で性科学に迫り，その知見を取り入れたかが考察される必要がある．

だが一方で，第 2 に，セックス／ジェンダーという図式そのものの妥当性を考える必要がある．冒頭でも述べたが，Connell はこの図式を，行き詰まったものとしてつぎのように説明する．

> 文化的に選択された差異（「性役割」）としてのジェンダーという考え方は，その差異の一方の側，すなわち男性的なものに，もう一方の側よりも常に高い価値が置かれる理由を説明できなかった．ジェンダーを身体から切り離すことは，身体をより強調するフェミニズムの発展に逆行するものだった．（Connell 2002=2008: 62）

また Money も，次のように述べている．

> sex は生物学にあけわたされた．gender は心理学と社会科学にあけわたされた．かくして旧体制は復活した．（Money 1985: 282）

冒頭で述べたが，セックス／ジェンダーという図式そのものの妥当性を考える必要がある．このような要請は，Connell だけでなく，さまざまな立場から問われている（Sedgwick 1990; Delphy 1991=1998; 上谷 2010）．ジェンダーという概念がすでに社会科学における分析概念として定着している以上，その概念の系譜と，その概念によって何が示されようとしてきたのかを，今一度考えることが必要なのではないだろうか．

【注】

1) 以下では，原文が gender と表記されている文献は gender と表記し，翻訳されてジェンダーなどの訳語が充てられている場合はそれを用いる．

【文献】

青木やよひ，1985，「知の折り返しと現代——現代における女性的原理の意味」『看護展望』10(2): 35-41．（「女性原理とエコロジー」として再録：1986，『フェミニズムとエコロジー』新評論，189-206.）

編，1983，『シリーズ「プラグを抜く」 3 フェミニズムの宇宙』新評論．

Connell, Raewyn W., 2002, *Gender*, Cambridge: Polity Press.（=2008，多賀太訳『ジェンダー学の最前線』世界思想社.）

Delphy, Christine, 1991, "Penser le genre: quels problèmes?" *Sexe et genre: De la hiérachie entre les sexes*, édi té par Marie-Claude Hurtig, Michèle Kail et Hélène Rouch, Paris: Editions du CNRS.（＝1998，杉藤雅子訳「ジェンダーについて考える——なにが問題なのか？」棚沢直子編『女たちのフランス思想』勁草書房，37-63.）

Dreyfus, Hubert L. and Paul Rabinow, 1983, *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, 2nd ed., Chicago: University of Chicago Press.（＝1996，山形頼洋訳『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房.）

江原由美子，2000，『フェミニズムのパラドックス——定着による拡散』勁草書房

編，1990，『フェミニズム論争』勁草書房．

・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり，1989，『ジェンダーの社会学——女たち／男たちの世界』新曜社．

Germon, Jennifer, 2009, *Gender: A Genealogy of an Idea*, New York: Palgrave Macmillan.（＝2012，左古輝人訳『ジェンダーの系譜学』法政大学出版局.）

Illich, Ivan, 1983, *Gender*, Marion Boyas.（=1984，玉野井芳郎訳『ジェンダー——女と男の世界』岩波書店.）

井上輝子，2006，「『ジェンダー』『ジェンダーフリー』の使い方，使われ方」若桑みどりほか編著『「ジェンダー」の危機を超える！ 徹底討論！ バックラッシュ』青弓社，61-82.

・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編，2002，『岩波女性学事典』岩波書店．

Irvine, Janice M., [1990] 2005, *Disorders of Desire: Sexuality and Gender in Modern American Sexology*, rev. and expanded ed., Philadelphia, Temple University Press.

石田仁編著，2008，『性同一障害——ジェンダー・医療・特例法』御茶の水書房．

黒柳俊恭, 1987,『彷徨えるジェンダー——性別不快症候群のエスノグラフィー』現代書館.
Millet, Kate, 1970, *Sexual Politics*, New York: Doubleday.（＝1973，藤枝澪子訳『性の政治学』自由国民社.）
見田宗介・大澤真幸・吉見俊哉編，2012,『現代社会学事典』弘文堂.
Money, John, 1985, "The Conceptual Neutering of Gender and the Criminalisation of Sex," *Archives of Sexual Behaviour*, 14: 279-91.
Oakley, Ann, 1972, *Sex, Gender and Society*, New York: Harper Colophon Books.
落合恵美子，1989,『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
桜井裕子，1990,「エコロジカル・フェミニズム論争は終わったか——エコロジー危機とフェミニズム」，江原由美子編,『フェミニズム論争——70 年代から 90 年代へ』勁草書房，119-46.
Sedgwick, Eve Kosofsky, 1990, *Epistemology of the Closet*, Berkeley: University of California.（＝1999, 外岡尚美訳,『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀』青土社.）
嶋田津矢子, 1984,「セックスとジェンダーのダイナミクス——婦人解放の新しい地平」『関西学院大学社会学部紀要』48: 73-87.
Stoller, Robert J., 1968, *Sex and Gender; Vol. 1: The Development of Masculinity and Femininity*, New York: Science House.（=1973，桑原勇吉訳『性と性別』岩崎学術出版社.）
鶴田幸恵，2009,『性同一性障害のエスノグラフィ——性現象の社会学』ハーベスト社.
上野千鶴子，1985,「女は世界を救えるか？——イリイチ"ジェンダー"論徹底批判」『現代思想』13(1): 80-104,（「女は世界を救えるか——イリイチ『ジェンダー』論徹底批判」として再録：1986,『女は世界を救えるか』勁草書房，118-61.）
上谷香陽, 2010,「ジェンダー概念の再考——セックスとジェンダーの区別をめぐって」『文教大学国際学部紀要』20(2): 1-15.
山本哲士，1990,『ジェンダーと愛——男女学入門』新曜社.
————編，1983,『シリーズ「プラグを抜く」 1 経済セックスとジェンダー』新評論.